

大賞

アナログ重視型Ma a S実装の諸活動

十勝バス/KPMGモビリティ研究所

十勝バス(野村文吾社長、北海道帯広市)は、高齢化が進む地域の商店や飲食店の撤退も相次ぐ帯広市郊外の「大空団地」で、路線バスを活用した地域活性化の取り組みを展開している。デジタル化を前提とせず、幅広い世代を対象に、町づくりにつなげるのが特徴だ。アナログでの成功体験に基づきMa a S(サービス)としてのモビリティの社会実装で成果を上げている。

同地域では交通手段の9割以上を自家用車が占めている。コロナ禍の影響もあり、バス路線の維持が危機的な状況となっていた。こうした状況は、地域の商店が事業を継続して「モノ」を難しくしており、移動難民・

コミュニティづくりのベースに地域再活性化



十勝バスは、大手からの投資を引き出すためにも自ら町づくりに動き出す。帯広市地域公共交通活性化協議会の進捗試験として市内循環バスの運行を開始。沿線住民を別訪問し、バスに乗る「理由」を調査した。その声に基づき、利用方法の周知など不安を解消することも、利用者拡大に努めた。

2020年10月から大空団地に住民向けに電話受付、ドライブインによる経路設定を行うアナログ版コマンド交通の運行を開始した。実績が1日当たり10件に達した段階で、AIシステムを導入し、オンデマンド相乗サービスへと発展させている。

21年にKPMGモビリティ研究所と「十勝・帯広新モビリティ」を結成。マルシエを運行して、井戸端会議を「はじめ」として地域住民への憩いの場の提供を目的として、大空団地内に焼き肉店を開業。営業時間外はフリー、スマートフォン教室や英会話教室を実施するなど、賑わいの創出にも役立っている。

「選考委員特別賞」高齢化・人口減少による地域の課題に対し、地道な努力を重ねて、コミュニティ活性化のため、お客さまの声を直接聞く実装に即した行動を、デジタルツールを活用し、Ma a Sとして社会実装への道筋をつけ、成果を上げている。同様な課題に悩む地域へ光を灯すものであり、コロナ禍で大きく打撃を受けた地域公共交通事業者にも、課題を解決していくことが期待される。

クルマ・社会・パートナーシップ大賞特集

業界関係者とユーザーの貢献に感謝を



クルマ・社会・パートナーシップ大賞

地道な努力に幅広く光を

さまざまな取り組みが世に広がる一助に

日本自動車会議所(内山田竹志会長)は、第2回(2022年度)クルマ・社会・パートナーシップ大賞(CSP大賞)を、共催「日刊自動車新聞社」の受賞者を決定した。大賞は、移動を増やすことによるコミュニティづくりを核に地域活性化を図る十勝バス(野村文吾社長、北海道帯広市)と共同で応募したKPMGモビリティ研究所を選定。長年にわたり車いす修理のボランティア活動を継続してきた豊田合成を選考委員特別賞とした。10日、都内のホテルで表彰式を開催する。

CSP大賞は、自動車業界 組みに贈る「地域・コミュニティ」のさまざまな貢献に感謝を伝えることにも、それらの達成につながる取り組みの取組が世の中広がる「SDGs貢献一助になれば」という思いから、賞、ユーザーとして自動車21年に創設した。2回目となる今回は、昨年9月の公募開始から11月末までに全国から68件の応募があった。その中から選考委員会が表彰にふさわしい取り組みとして「グッドパートナーシップ事業」30件を選定。さらに表彰の目的や、日本自動車会議所のビジョンに合致する大賞とそれに次ぐ選考委員特別賞、各部門賞を決めた。

部門賞は、モビリティに関する課題やモビリティの手段を通じた社会課題の解決への取り組みに対する「モビリティ・ソリューション賞」、地域や自治体と協働・連携し、地域活性化の取組

「グッドパートナーシップ事業」30件を選定。さらに表彰の目的や、日本自動車会議所のビジョンに合致する大賞とそれに次ぐ選考委員特別賞、各部門賞を決めた。

部門賞は、モビリティに関する課題やモビリティの手段を通じた社会課題の解決への取り組みに対する「モビリティ・ソリューション賞」、地域や自治体と協働・連携し、地域活性化の取組

「グッドパートナーシップ事業」30件を選定。さらに表彰の目的や、日本自動車会議所のビジョンに合致する大賞とそれに次ぐ選考委員特別賞、各部門賞を決めた。

部門賞は、モビリティに関する課題やモビリティの手段を通じた社会課題の解決への取り組みに対する「モビリティ・ソリューション賞」、地域や自治体と協働・連携し、地域活性化の取組

人々の熱意、心に刻んで

日本自動車会議所 内山田 竹志会長



このたび第2回(2022年度)クルマ・社会・パートナーシップ大賞(CSP大賞)の表彰式に際して、主催者を代表し、ご挨拶申し上げます。

社会の動きは少しずつコロナ前に近づいていると感じられる中ではありますが、依然として感染状況は一進一退を繰り返しております。さらに、ウクライナにおける紛争や物価・エネルギー価格の高騰、歴史的な円安、気候変動、少子高齢化など、さまざまな難しい課題が日々私たちの生活・暮らしに大きな影響を与えております。

自動車産業も100年に一度とも言われる大変革期の真っ只中にあり、皆様と課題を共有しながら、新たなモビリティ社会の実現に向けて、自動車業界に身を置く550万人の方々、日本や地域の経済・社会を牽引するリーディング産業・業界の誇りをもって働いておられます。

この「クルマ・社会・パートナーシップ大賞」は、そうした550万人の方々や自動車のユーザーが、たとえ光が当たらないことであっても、自動車にかかわる全ての方々から果たされている貢献に対して「ありがとう」と感謝を伝えることにも、それぞれの素晴らしい取り組みがもたらした人々の目や耳に入り、世の中に大きく広がっていく一助になればとの思いから、日本自動車会議所が創立75周年を記念し、創設したものです。

昨年9月、第2回CSP大賞の公募を開始させていただきました。当初の出だしは、芳しくなく、とても憂慮しましたが、皆様のご協力により、日本全国から昨年とほぼ同様の68件もの応募をいただきました。皆様これまでの取り組みに心から敬意を表しますとともに、本大賞へのご理解・ご協力に対して、厚く御礼申し上げます。主催者として今後ご応募いただいた全ての取り組みを十分に理解し、社会に広く認知されるために支援してまいります。

今回も、選考委員の皆様による熱心かつ厳正な審議の結果、受賞者が決定されました。お忙しい中審議にお時間をいただきました選考委員の皆様へ感謝申し上げますとともに、受賞者の皆様にはあらためてお喜びを申し上げます。

選考の結果、30件の「グッドパートナーシップ事業」が選定され、その中から「大賞」、それに次ぐ「選考委員特別賞」の受賞者が決定されました。その後、部門賞となる「モビリティ・ソリューション賞」「地域・コミュニティ活性化賞」「SDGs貢献賞」「自動車ユーザー連携賞」が選ばれました。受賞者は、第1回受賞者の方々にも増して、それぞれが持つ人々の熱意や創意工夫、実行力など、大変強く心に刻まれるものでありま

た。受賞された取り組みにつきましては、私どもとしても、幅広く広報を行ってまいりますので、事業者の皆様とともに関係各位のご協力をよろしくお願い申し上げます。

「クルマ・社会・パートナーシップ大賞」は、当会議所の大切な事業として今後も継続してまいりますし、自動車業界の賞としても、今後も皆様へ愛される賞として、さらに成長させていただきたいと思っております。第3回となる来年度の大賞においても、数多くの素晴らしい取り組みに接することができることを大変楽しみにしております。今後は、本賞の仕組みや運営にさらに力を入れてまいりますので、引き続き、各方面からのご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、受賞者の皆様、会員の皆様はじめ、自動車業界、自動車にかかわる全ての皆様のますますのご発展をご祈念申し上げます。表彰にあたっての感謝とお祝いのご挨拶とさせていただきます。

今回の「クルマ・社会・パートナーシップ大賞」は、当会議所の大切な事業として今後も継続してまいりますし、自動車業界の賞としても、今後も皆様へ愛される賞として、さらに成長させていただきたいと思っております。第3回となる来年度の大賞においても、数多くの素晴らしい取り組みに接することができることを大変楽しみにしております。今後は、本賞の仕組みや運営にさらに力を入れてまいりますので、引き続き、各方面からのご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、受賞者の皆様、会員の皆様はじめ、自動車業界、自動車にかかわる全ての皆様のますますのご発展をご祈念申し上げます。表彰にあたっての感謝とお祝いのご挨拶とさせていただきます。

選考委員特別賞

社内有志のボランティアサークル「車いすドクターズ」の車いす修理活動

豊田合成

豊田合成は、社内有志のボランティアサークル「車いすドクターズ」による車いす修理活動を1996年から継続して実施している。近隣の老人ホームや地域の社会福祉協議会など年間12カ所を訪問し、500台以上を修理する。2015年からは高校生に車いす修理の指導を実施し、各地で修理ボランティアを広げる活動にもつなげている。

老人ホームでは車いすの利用者が多いものの、ホーム内で修理ができる職員がいなかったり、不自由な状態で利用しているという話を、近隣の社会福祉協議会から聞いたのがきっかけ。社内に、自転車や車いす修理スキルを持つ従業員がいたこと、従

作業後に返却するという形に変えて継続している。さらに、自社の活動にともなう、青少年の教育にも役立っている。

また、15年からは、東日本大震災の復興支援活動として、岩手県立宮古商工高等学校で生徒へ車いすの修理指導を実施している。震災後、直接のボランティア活動を申し出たものの、大半が遠慮して実現しなかったという経緯があるからだ。同じ若い手県民の手で修理ができるよう、修理方法を指導する形で支援を継続している。



「選考委員特別賞」高齢化・人口減少による地域の課題に対し、地道な努力を重ねて、コミュニティ活性化のため、お客さまの声を直接聞く実装に即した行動を、デジタルツールを活用し、Ma a Sとして社会実装への道筋をつけ、成果を上げている。同様な課題に悩む地域へ光を灯すものであり、コロナ禍で大きく打撃を受けた地域公共交通事業者にも、課題を解決していくことが期待される。

選考委員特別賞

社内有志のボランティアサークル「車いすドクターズ」の車いす修理活動

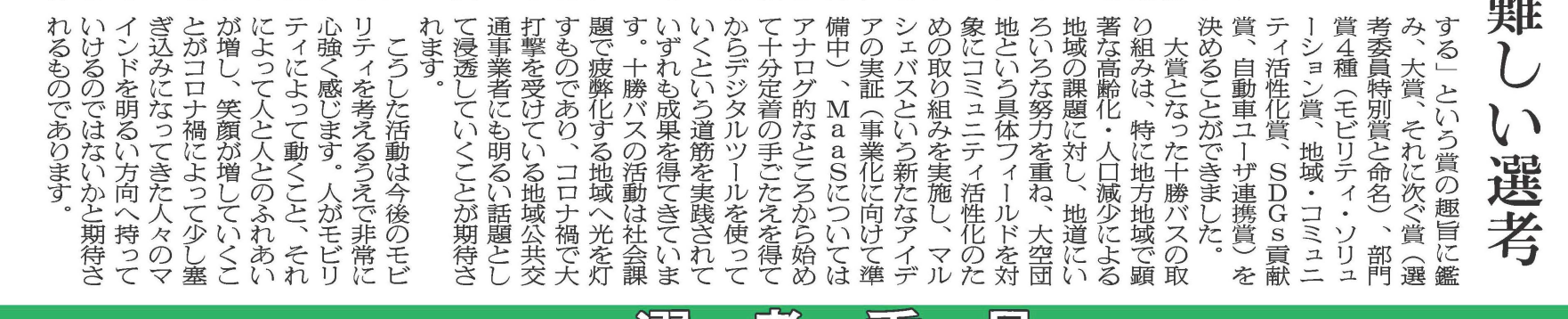
豊田合成

豊田合成は、社内有志のボランティアサークル「車いすドクターズ」による車いす修理活動を1996年から継続して実施している。近隣の老人ホームや地域の社会福祉協議会など年間12カ所を訪問し、500台以上を修理する。2015年からは高校生に車いす修理の指導を実施し、各地で修理ボランティアを広げる活動にもつなげている。

老人ホームでは車いすの利用者が多いものの、ホーム内で修理ができる職員がいなかったり、不自由な状態で利用しているという話を、近隣の社会福祉協議会から聞いたのがきっかけ。社内に、自転車や車いす修理スキルを持つ従業員がいたこと、従

作業後に返却するという形に変えて継続している。さらに、自社の活動にともなう、青少年の教育にも役立っている。

また、15年からは、東日本大震災の復興支援活動として、岩手県立宮古商工高等学校で生徒へ車いすの修理指導を実施している。震災後、直接のボランティア活動を申し出たものの、大半が遠慮して実現しなかったという経緯があるからだ。同じ若い手県民の手で修理ができるよう、修理方法を指導する形で支援を継続している。



「選考委員特別賞」高齢化・人口減少による地域の課題に対し、地道な努力を重ねて、コミュニティ活性化のため、お客さまの声を直接聞く実装に即した行動を、デジタルツールを活用し、Ma a Sとして社会実装への道筋をつけ、成果を上げている。同様な課題に悩む地域へ光を灯すものであり、コロナ禍で大きく打撃を受けた地域公共交通事業者にも、課題を解決していくことが期待される。

選考委員

- 関根 千佳(コーディネーター 長兼シニアフェロー)
- 森 慎(オルタナティブ代表取締役社長、「オルタナ」編集長)
- 加藤 和夫(日本自動車販売協会連合会理事相談役)
- 田口 亜希(日本財団パラスポーツサポーター 推進戦略部ディレクター)
- 山岡 正博(日本自動車会議所専務理事)
- 花井 真紀子(日刊自動車新聞社取締役)

ハイレベルな内容に難しい選考

選考委員長 講評

東京大学名誉教授 日本自動車研究所代表理事・研究所長 **鎌田 実**

今年もクルマ・社会・パートナーシップ大賞の選考委員長を担いだ。第2回目というところで昨年に比べてどうなるのか気になりしたが、応募数は前回とほぼ同水準の68件に及びました。

各内容を詳しく見ると、初回よりも全体的にレベルが上がったように感じました。初回の受賞者の素晴らしい活動がその賞を位置づけ、今回の応募者はそれをもとに応募されたこと、選考側としては「これを選ばないとなかなか難題を突き付けられたようにも思います。しかし、選考作業は楽しいものでした。日本の各地で日々行われている活動が日々行われたいという感動、感謝しながら採点付けを行いました。

選考委員の先生方は昨年と同一でご専門は多岐にわたりますが、選考委員会で多様な視

日々行われる素晴らしい活動に感激

点からの意見をいただくながら、長い時間をかけて丁寧に議論を重ねて最終結果に至ることができました。

今回は選考委員の方から各分野でグッドパートナーシップに値するもの35件程度を上げてもらったこと、上位賞に値するもの何点か推薦してもらった。昨年グッドパートナーシップ賞を19件としましたが、今回は前述のように、優れたものが多く30件を選定いたしました。

この中から上位賞を選考していくプロセスに進みました。優れた内容はかなり厚いので、非常に得意な分野から、合意を得て案件としていく作業は心を鬼にしての選別となりまして、「感謝のメッセージ」を伝える、同様な取り組みが展開されていくことを期待されるものであります。

点からの意見をいただくながら、長い時間をかけて丁寧に議論を重ねて最終結果に至ることができました。

今回は選考委員の方から各分野でグッドパートナーシップに値するもの35件程度を上げてもらったこと、上位賞に値するもの何点か推薦してもらった。昨年グッドパートナーシップ賞を19件としましたが、今回は前述のように、優れたものが多く30件を選定いたしました。

この中から上位賞を選考していくプロセスに進みました。優れた内容はかなり厚いので、非常に得意な分野から、合意を得て案件としていく作業は心を鬼にしての選別となりまして、「感謝のメッセージ」を伝える、同様な取り組みが展開されていくことを期待されるものであります。